

紹介

高原美忠氏 著

「神ながらの道」

鎌田 純 一

その自序に

久保田博士をはじめ多くの人から、私の喜寿記念に、今まで書きちらし、云ひちらしてきたものを集めて、出版せよとのおすゝめをうけ、誠にうらはづかしい思ひながら、こゝにまとめましたものゝ、さて、あのことも、このことも、思ひながら果さずにあつておくことが多く、又書いたものも、散逸しあるものがあり、別にひとつのまとめたものにして、新に書きたいとも思つてゐたので、ためらひもあつたが、これからさきの階台にするため、又拙いながら諸君子によつて叩き台にでもらへたら仕合と思ひ、さらに今は世になき諸先生の、お目にもかけたく思つた心を記して序とする。

と記されてゐる。まことに簡にして要を得た文章、その著者を知らぬ人にも爽やかに響くであらうが、著者を知る人には、その御人柄とともに、この枯れた文章が深い味はひとなつて胸を搏つであらう。神道界には高僧・聖者といふやうな呼び方はないが、もし有り

とすればこの著者のやうな人を呼ぶのであらう。著者は大正五年神宮皇学館本科を卒業、その直後、教育界に少しく居られたが、あとずつと神明に奉仕され、現在八坂神社宮司であり、また皇学館大学学長であり、斯界の先達として夙夜活躍されてゐる。

その序に記されてゐるやうに、本書はその著者が、これまであちこちの雑誌・新聞などに掲載された論文十七篇を集められたものである。これまで、それらあちこちの雑誌で拝見したものを、斯うして一冊にまとめられてみると、そこに一貫した一冊の書としての新鮮さ、またその魂といふべきものが感じられて、それが強く人々に訴へるであらうとみられるのである。改めて著者の学問、信仰がその人格とともに強く浮び出た感である。念のため、内容を記すと、「神ながらの道」「神格の展開」「八雲神詠」「天御陰日御蔭」「環状石籬について」「函館八幡宮史話」「宣長翁の信仰」「家庭の祭祀」「山鉾の意義」「嘉永以後の八坂神社」「伊勢神宮と我国体について」「神宮皇学館」「神の心、人の心」「孝明天皇の御製」「神道の精神」「蘇民将来の話」「世界の大被」「大被詞」となつてゐる。それを細かく区分すると、神道神学あり、神道史学あり、神社史あり、神道考古学あり、祭祀学あり、神道民俗学あり、祝詞・古典学ありと実に幅が広い。そして、それらが全体としてまた一つの高潔な学風で蔽はれて書名の「神ながらの道」との内容にふさはしく、手にしてゐて、思はず膝を正し、襟を正さしめられるのである。そのすべてを紹介する余裕もないので、その一、二を紹介するに、先づ「一 神ながらの道」で古事記聞巻頭額の天之御中主神について、通説の天の中心の主神とされる解釈に対して、そ

のナカは中心、中央でなく「ナカミの意で、そこに含まれてゐる全体をさす言葉」と解され、日本の神は生み出す神であり、古事記は宇宙の中に生産の靈力を見、その劈頭に三神を挙げたものとみられる。而して神世七代の神についても同様に解釈されて行つて、そこに「何れも日本の自然のうちに神を見出した過程が自然にあらはれてゐるし、時間と空間を超越した生命のうちに美と聖とによつて、そこに神を見、それらが愛によつて生れることをさとつた由来が知られる」と述べられ、更に「これが日本の神の本質であり、日本の神学はここに基礎をおいたものであります」と記されてゐる。先づ「神ながらの道」の「神」を斯く抑へられるのである。而して、その「ながら」の「な」は「の」の意味、「から」は「国から」の「から」と同じであり、「国がら」を「国体」と云ひ、「家がら」を「家格」と云ふなら「神ながら」は「神格」と解釈できやうとみられ、「神ながらの道」は、「神格の道」であり、「神格に至る道」の意とされる。而して、更にその神格に至る道の一つとして大被より説かれ、先づ自己の罪の自覚、反省、告白により罪を被ひ清めるべきであり、その謙虚に罪の自覚をし、又告白して神の許を得、清浄になることも神格に至る道であり、神ながらの道の教であるとされる。これを更に各地の祭礼、民俗行事に例をとり、懇切に説明されて行くのである。「二 神格の展開」では、古事記・日本書紀にみられるやうな神系譜は、人の系譜とは異なつた見方をすべきである。それは信仰が更に信仰を生む由来を示したもので、さとりがまたさとりを生む所以を示したものであるとされて、日本書紀にみられる神々を深くその神名より洞察して、その神々に神格に於て

同一なるもののみ、それが反覆して説かれ、更当して出現され、歴史的社會基盤の変化により、その神格が展開して行く相をみて、そこにその神代史の枢軸をなす神の姿をみられるのである。これをみると、これまでの國語学・神話学などよりのアプローチの大半は、児童に等しく、古典解釈以前であり、この著者の如き、長年真剣に神明に奉仕される神職であり、しかも基礎的な幅広い学問のある人にして始めてその古典が心眼に達して深い味はひとなり、その真姿が躍如として啓示されるのを見る思ひがする。高潔なる土にして、始めて神典も神典としての格調高い姿をみせるものであらう。この著者にして「三 八雲神詠」で述べられる如く、その「八雲立つ出雲八重垣」の歌をみられても、そこに「自然科学に於ける近代の立派な業績を見る時、心の教の失はれた現代を恥しく思ひ、中世の教より進んだ教を立て、今の人に向はねばならぬと、私は常に思つてゐるが、この神詠に対する解釈を考へられてゐるうちに、現代の教学の建て方を教へられたやうに思ふ。神の教は今も猶生きてゐる。」とのやうな神の教へが得られるのではなからうか。「七 宣長翁の信仰」では、歴史的にその信仰を坦々とした文章のうちに述べて行かれる。これを見て、かつて私は我師に人物批判、人物研究はその人物以上の人物にして始めてなし得るものと戒められたが、この著者の宣長研究は、かかる懸念を越えたものと、そこに一つの畏怖さへ感じさせられたのである。「六 函館八幡宮史話」、「九 山鉾の意義」、「十 嘉永以後の八坂神社」はその奉仕された神社に関する研究であるが、多くの神社奉仕者の範としてふさはしい論述であらう。

紙幅の関係で、更に充分に紹介し得ないが、「八 家庭の祭祀」も不朽の論文であらうし、他のいづれも深い含蓄のある論である。その論、なかに小さな点で異説もあらう。しかし、それはその基礎考証、基礎解釈の細かい部分に關することであり、この著者の偉大なる学風のもとには、殆んど問題とならない。枝葉末節のこととなる。この書こそ、神職、神道学者はもとより神道に志すもの、その学問態度を真似ぶ意味からも姿勢を正し何回も繰返し読むべき書であらう。

(B 6判・本文三八八頁、頒価一、二〇〇円、送料七〇円、神道史学会発行、京都市東山区祇園町八坂神社内、振替口座 京都九〇三五番)

皇学館大学講演
叢書 第十六輯

憶良の人と作品

福岡女子大学長
文学博士 倉野 憲司

万葉集の歌と詞書き等を精細に考察した上で、しかも平易に憶良の姿を浮彫りにした書。

皇学館大学出版部発行
(頒価七〇円・送料三五円)

「神ながらの道」 (鎌田)

久保田 収 著

近世史学史論考

現代史学は欧米史学の影響をうけることが大きいが、しかしその基礎に近世史学の培ひのあることを見逃してはならない。その近世史観がいかに形成され、水戸の修史事業がどのような広がりや深さで進められ、それが例へば仏教史学の面にいかなる影響を与へ、また明治維新の成立とどのやうな関係をもつてゐるか、などの諸問題を、実證的に追求し、それを近世史の進展の中に正しく位置づけようとしたのが本書である。

目次

- 第一章 近世史観の形成
 - 一、山鹿素行と中朝事実
 - 二、山崎闇斎と倭鑑
 - 三、浅見綱斎の史学思想
 - 第二章 水戸史学の確立
 - 一、水戸光圀の学問的業績
 - 二、水戸史学と和学
 - 三、水戸史学と国学
 - 第三章 仏教史学の発達
 - 一、僧伝の成立
 - 二、師蛮と水戸史学
 - 第四章 幕末尊皇運動と史学
 - 一、有馬正義の楠公研究
 - 二、真木保臣の史観と楠公
- 結語
- A 5判 本文二八六頁 附人名書名索引
定価 一、八〇〇円 送料 九〇円

516 伊勢市倉田山 皇学館大学内
発行所 皇学館大学出版部

電話 伊勢(〇五九六三) 2-1000-1
振替口座 名古屋一六三二六